

厚生労働科学研究費補助金（認知症政策研究事業）  
分担研究報告書

認知症の人に対する安全で効果的な看護手法の開発

研究分担者 深堀 浩樹 慶應義塾大学看護医療学部 老年看護学分野 教授

**研究要旨** 認知症の人に対して安全で効果的な看護・医療・ケアを提供する上では、身体拘束の最小化の方法を検討することが必要である。本研究では、安全で効果的な看護手法の開発の一助として、①身体拘束の是非が争われた裁判例の分析、②身体拘束に関する判例に関する医学論文の検討、③認知症の専門病棟からの退院を促進する手法についての文献検討の3つの活動に取り組み、これらを統合することで、様々な場面における身体拘束の最小化の方法を検討することを目的とした。

## A. 研究目的

認知症の人に対する安全で効果的な看護・医療・ケアを提供する上では、様々な場において身体拘束の最小化の方法を検討することが必要である。本研究では、安全で効果的な看護手法の開発の一助として、①身体拘束の是非が争われた裁判例の分析、②身体拘束に関する判例に関する医学論文の検討、③認知症の専門病棟からの退院を促進する手法についての文献検討の3つの活動に取り組み、これらを統合することで、様々な場面における身体拘束の最小化の方法を検討することを目的とした。

## B. 研究方法

### 1) 研究チームの構築

2019年度に引き続き、看護学・医学・法学の研究者からなる学際的研究チームを構築した。研究チームのメンバーは、2019年度からメンバーであった分担研究者の深堀浩樹（慶應義塾大学 看護医療学部 老年看護学分野・教授）、小川朝生（国立がん研究センター 先端医療開発センター 精神腫瘍学開発分野・センター長）、松原孝明氏（大東文化大学 法学部法律学科・教授）、辻麻由美氏（長崎大学 大学院医歯薬学総合研究科 看護実践科学分野（老年看護学）・助教）、那須佳津美氏（慶應義塾大学 SFC 研究所・上席所員）に加え、金井直子氏（聖隷福祉事業団・看護師）を加えた。

### 2) 身体拘束の是非が争点となった裁判例の分析

2019年度に法情報総合データベースであるDI-law.comを用いて、収集した身体拘束についての争われた裁判例（精神科を除く）についての質的内容分析を行った。質的内容分析を行うための分析枠組みを、医学・看護学領域の裁判例についての先行研究の検討と研究チームでの協議により開発した。

### 3) 身体拘束に関係した判例に関する医学論文の検討

身体拘束に係わる判例について検討した医学論文について文献検討を行った。医学中央雑誌で、身体拘束（統制語/身体抑制）、訴訟（統制語/裁判）、判例といったキーワードを用いて検索を行った。取り込み基準としては、高齢者を対象とした文献や、医療・福祉機関で起こった身体拘束に関わる訴訟について解析した文献とした。分析対象となった研究論文について、判例情報データのソース情報や、判例に関しての解析視点について分析を行った。

### 4) 認知症の専門病棟からの退院を促進する手法についての文献検討

認知症の行動・心理症状のために認知症の専門病棟に入院する認知症の人は身体拘束を受けやすく早期の退院を図ることが望ましい。そのため、認知症の行動・心理症状のために認知症の専門病棟に入院する認知症の人の退院を促進する手法についての文献検討（スコアピングレビュー）を行った。MEDLINE, CINAHL, Cochrane Library, PsycINFOのデータベースを用いて検索を行い PRISMA ガイドラインに沿って検討した。

## 5) その他の関連研究

認知症の人に対する安全で効果的な看護・医療・ケア提供を検討するために、認知症の人や高齢者に関する看護・ケアに関するその他の関連研究を実施した。

(倫理面への配慮)

上記 2)～4)の研究内容は、裁判の判例、判例や退院促進の手法に関する学術論文など既存の公表されている資料を文政対象としている。そのため「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」等の適用対象とならない。

## C. 研究結果

### 1) 研究チームによる研究活動

新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況を鑑み、メールやオンライン会議による協議を複数回実施した。2021年3月にはオンライン会議で2020年度の総括を行った。

### 2) 身体拘束の是非が争点となった裁判例の分析

2019年度に行った文献検索結果に数件の裁判例を加え、身体拘束の違法性が争点となった2件と身体拘束の必要性が患者・家族側から主張された9件の合計11件の裁判例を得て分析対象とした。

先行研究と研究チームでの協議の結果、現時点で、患者の年齢、疾患、認知機能または意識レベル、事故歴、医療(ケア)提供体制、事故内容、転帰、身体拘束を行う(行わない)に至った状況、身体拘束の方法(身体拘束しなかった時の対応方法)、身体拘束時間、身体拘束した(しなかった)人、患者・家族側の主張、病院・施設側の主張、裁判所の判断などについて細分化し分析可能な枠組みに向け、初期段階の分析枠組みが完成した。

これらの事例の中で実施された、身体拘束に関わるケア提供者(看護職、介護職、医師など)の具体的な行為(判断や行動)に焦点化して、質的内容分析を開始した。データ管理には、質的データ分析ソフト NVivo11 を用いた。

### 3) 身体拘束に関係した判例に関する医学論文の検討

医学中央雑誌での検索の結果、1971年5月～2020年9月までの172件の論文がヒットした。そのうち取り込み基準を満たした論文で、看護職の行為が訴訟の対象となった論文や看護職の過失が認定された論文2文献について

分析した。その結果、判例部分を考察した内容分析や、判例情報DBや判例雑誌の中で記載されている結果予見義務や結果回避義務に関する記述を内容分析した解析が行われていることが明らかとなった。

### 4) 認知症の専門病棟からの退院を促進する手法についての文献検討

データベースから抽出された3000件ほどの文献の質の評価をした結果4つの論文が選定された。

## D. 考察

### 1) 研究チームの構築

看護学・医学・法学の研究者からなる学際的研究チームに、2020年度は認知症の専門病棟における退院促進の手法を検討するために研究者を追加した。多様な場におけるから安全で効果的な看護・医療・ケアの提供方法について検討できる体制が強化された。

### 2) 身体拘束の是非が争点となった裁判例のデータ収集

初期段階の分析枠組みが完成し質的データ分析ソフトを用いた分析を開始している。ため、今後身体拘束に関わるケア提供者(看護職、介護職、医師など)の具体的な行為(判断や行動)に焦点化して分析を行うことで、法学者による過去の報告や分析とは異なるケア提供側の視点での知見が得られることが期待できる。

### 3) 身体拘束に関する判例に関する医学論文の検討

過去の身体拘束の判例を分析した医学論文が抽出され、今後2)の分析を行っていく際にも参照できる。今後、身体拘束に限定せず認知症ケア・高齢者ケアに関する判例について検討した医学論文の検討を行うことで、より安全で効果的な看護・医療・ケア提供の検討につながることを期待できる。

### 4) 認知症の専門病棟からの退院を促進する手法についての文献検討

文献の質の評価が終了し対象文献が確定したため、今後結果の公表を行っていく

## E. 結論

身体拘束の是非が争われた裁判例を分析し、身体拘束が行われる状況・プロセス・判断、身体拘束が当事者や家族、ケア提供者に及ぼす影響等について探索的に明らかにすること

を目的とし、看護学・医学・法学の研究者からなる学際的研究チームの構築、身体拘束が争点となった裁判例についての予備的なデータ収集、質的内容分析のための析枠組みの開発を行った。結果として、11件の裁判例が得られ、質的内容分析のための初期段階の析枠組みを完成させた。また、これらの裁判例の中で実施された、身体拘束に関わるケア提供者の具体的な行為（判断や行動）に関する質的内容分析を開始した。2020年度はより系統的データ収集を行い、質的内容分析による解析を終了させる予定である。

## F. 健康危険情報

特記すべきことなし。

## G. 研究発表

### 論文発表

1. Higuchi, A., Yoshii, A., Takita, M., Tsubokura, M., Fukahori, H., & Igarashi, R. (2020). Nurses' perceptions of medical procedures and nursing practices for older patients with non-cancer long-term illness and do-not-attempt-resuscitation orders: A vignette study. *Nurs Open*, 7(4), 1179-1186. doi:10.1002/nop2.495
2. Hirooka, K., Nakanishi, M., Fukahori, H., & Nishida, A. (2020). Impact of dementia on quality of death among cancer patients: An observational study of home palliative care users. *Geriatr Gerontol Int*, 20(4), 354-359. doi:10.1111/ggi.13860
3. Kodama, Y., Fukahori, H., Tse, M., & Yamamoto-Mitani, N. (2020). Pain Prevalence, Pain Management, and the Need for Pain Education in Healthcare Undergraduates. *Pain Manag Nurs*. doi:10.1016/j.pmn.2020.09.008
4. Nasu, K., Konno, R., & Fukahori, H. (2020). End-of-life nursing care practice in long-term care settings for older adults: A qualitative systematic review. *Int J Nurs Pract*, 26(2), e12771. doi:10.1111/ijn.12771
5. Nasu, K., Sato, K., & Fukahori, H. (2020). Rebuilding and guiding a care

community: A grounded theory of end-of-life nursing care practice in long-term care settings. *J Adv Nurs*, 76(4), 1009-1018. doi:10.1111/jan.14294

6. Okumura-Hiroshige, A., Fukahori, H., Yoshioka, S., Nishiyama, M., Takamichi, K., & Kuwata, M. (2020). Effect of an end-of-life gerontological nursing education programme on the attitudes and knowledge of clinical nurses: A non-randomised controlled trial. *Int J Older People Nurs*, 15(3), e12309. doi:10.1111/opn.12309
7. Takahashi, Z., Yamakawa, M., Nakanishi, M., Fukahori, H., Igarashi, N., Aoyama, M., . . . Miyashita, M. (2021). Defining a good death for people with dementia: A scoping review. *Jpn J Nurs Sci*, e12402. doi:10.1111/jjns.12402
8. 森陽子, 深堀浩樹. (2020). 訪問看護事業所による就業時の教育的支援への臨床経験を持つ新人訪問看護師の認識. *日本看護評価学会誌*, 10(1), 31-39.

### 雑誌記事

1. 深堀浩樹 (2020). 【看護研究における報告ガイドライン 2】看護研究で念頭に置いておきたい報告ガイドライン ヘルスサービス研究における混合研究法による研究の質. *看護研究*, 53(2), 118-120.
2. 真志田祐理子, 大河原啓文, 深堀浩樹 (2020). 【看護研究における報告ガイドライン 2】看護研究で念頭に置いておきたい報告ガイドライン CONSORT-EHEALTH Web ベースおよびモバイル端末による保健介入の評価レポートの改善および標準化. *看護研究*, 53(2), 144-145.
3. 那須佳津美, 深堀浩樹 (2020). 【看護研究における報告ガイドライン 2】看護研究で念頭に置いておきたい報告ガイドライン ENTREQ 質的研究の統合の報告における透明性を高める ENTREQ 声明. *看護研究*, 53(2), 98-99.
4. 本田順子, 深堀浩樹. (2020). 【看護研究における報告ガイドライン 2】看護研究で念頭に置いておきたい報告ガイドライン 組織のケーススタディの方法論的フレームワークの開発 迅速レビューと

- コンセンサス形成プロセス. 看護研究, 53(2), 150-151.
5. 友滝愛, 加藤尚子, 柏原康佑, 木戸芳史, 本田順子, 深堀浩樹. (2020). Explanation and elaboration paper(E&E) for the Guideline for Reporting Evidence-based practice Educational interventions and Teaching(GREET) 2016 概説:根拠に基づく実践の教育的介入と教育の報告ガイドライン(GREET)2016. 看護研究, 53(3), 222-227.
  6. 友滝愛, 加藤尚子, 柏原康佑, 木戸芳史, 本田順子, 深堀浩樹. (2020). 【看護研究における報告ガイドライン 2】看護研究で念頭に置いておきたい報告ガイドライン GREET 根拠に基づく実践の教育的介入と教育の報告ガイドライン(GREET). 看護研究, 53(2), 152-153.
  7. 廣岡佳代, 松本佐知子, 深堀浩樹. (2020). 【看護研究における報告ガイドライン 2】看護研究で念頭に置いておきたい報告ガイドライン StaRI 実装研究の報告基準に関する StaRI 声明. 看護研究, 53(2), 116-117.
  8. Nishikawa, Y., Fukahori, H., Mizuno, A., & Kwong, J. S. -W. (2021). Cochrane corner: advance care planning for adults with heart failure. Heart.

#### 学会発表

1. 村上寿子, 皆吉泰知, 田村貴子, 廣山奈津子, 深堀浩樹. (2020). HCUにおける患者が不快に感じる「音」の内容調査. 共済医報, 69(Suppl.), 59.
2. 白川翔, 管野貴仁, 矢口秀穂, 塚田真由美, 廣山奈津子, 深堀浩樹. (2020). 術前患者の不安軽減に関する質的研究を活用した教育的介入の影響. 共済医報, 69(Suppl.), 60.
3. 野中瑞穂, 青山真帆, 中西三春, 山川みやえ, 深堀浩樹, 佐藤一樹, 高橋在也, 長江弘子, 森田達也, 坂井志麻, 宮下光令. (2020). 認知症の Good Death とは何か? 遺族・医師・看護師・介護職の認識に関する Web 調査. Palliative Care Research, 15(Suppl.), S208.

#### H. 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む。)

1. 特許取得  
なし。
2. 実用新案登録  
なし。
3. その他  
特記すべきことなし。